Aktivとの対比によるPassiv研究の変遷について

佐藤　厚*・進藤俊一

Über den Wandel der Forschung des Passivs im Gegensatz zum Aktiv

Atsushi Sato・Shunichi Shindo

（昭和59年10月31日受理）

Die vorliegende Arbeit behandelt erstens den Beginn der Passivforschung in Deutschland und versucht dann eine Zusammenfassung der verschiedenen Auffassungen der Genera des Verbs, 1～6 zu geben. Es wird die Frage gestellt, welche Stellung das unpersönliche Passiv in der Gegenüberstellung von Aktiv und Passiv einnimmt.

I. Der Anfang der Forschung über das Passiv
　Die älteste Passivforschung: Hans Conon von der Gabelentz "Über das Passivum" (1861)
II. Wie hat man das Passiv im Gegensatz zum Aktiv aufgefaßt?
　1. Tätigkeitsform (Aktiv) - Leideform (Passiv) H. Ammann : Nachgelassene Schriften, 1961
　2. Handlung (Aktiv) - Vorgang (werden-Passiv) - Zustand (sein-Passiv)
　　a. Die Auseinandersetzung zwischen W. Meyer-Lübke und K. Vossler (1922-26)
　　b. Schulz-Griesbach
　3. Die drei Geschehensarten : einfach (Aktiv) - bewirkt (werden-Passiv) - gegeben (sein-Passiv)
　　H. Glinz : Die innere Form des Deutschen, 1952
　4. Täterbezogene Diathese (Aktiv) - täterabgewandte Diathese (Passiv)
　　a. L. Weisgerber : Die Welt im "Passiv", 1963
　　b. J. Erben : Abriß der deutschen Grammatik, 1958
　5. Geschehensarten oder Sehweisen
　　Aktiv-Passiv: "objektiv" oder "subjektiv" zu unterscheidende Kategorien?
　6. Das Passiv als Umkehrung bzw. Konverse des Aktivs
　　J. Wackernagel: Passiv=Luxus der Sprache
III. Zusammenfassung
　Wie behandelt man das unpersönliche Passiv (z. B. Es wird getanzt.) (Aktiv-Passiv)?

I. Passiv研究の始まり

現在のPassiv研究は一体いつ頃から始まったのであろうか。

まず簡単な言語学史の整理をしてみると，19世紀というのが大きな境い目になっている。すなわち，遠く古代ギリシャに始まり，長い栄光の歴史を持つヨーロッパの言語研究は，19世紀に至るまで，すべて，個々の社会の実際的な言語問題の解決に向けられたものか，さもなければ，広く哲学的なつまり非言語学的な関心領域に属するものかであった。体系的に確立した作業方法と基礎の確実な一般理論を持つ固有の学問としての言語学になったのは実に19世紀に入ってからのことであった[1]。従って，以上に述べた言語学的背景から，本格的な，現在に通ずるPassiv研究が始まったのも当然19世紀以降ということであって，目下のところ筆者が確認しているPassivに関するまとまった最古の研究は，Sachsen-Altenburg公国の首相であり，かつ，アジア・オセアニア諸国語，特に満州語の研究で知られている Hans Conon von der Gabelentz (1807-74)[2]が1861年に発表した"Uber das Passivum"とい

* 秋田工業高等専門学校　独語　非常勤講師

う論文である。江沢建之助氏によれば[3]，この論文においては日本語を含む実に209の言語が比較して，取り扱われている。

なお，彼の子供の(Hans) Georg (Conon) von der Gabelentz も父の影響を受けて言語学の道を進み，中国語学者でかつまた，すぐれた一般言語学者でもあり，Ferdinand de Saussure の考え，特にその langue, parole, (facultè du) langage の諸概念及び共時態(synchronie)と通時態(diachronie)の区別を先取りしていたということによって現代的評価を受けている[4] 高名な学者で，親子二代にわたって言語研究を続けたわけである。

ただし，ドイツ文法としては既に J.Grimm のものが出ていて[5]，もちろん Passiv についても述べられている。19世紀はその言語学的バックボーンである歴史主義の色が濃い研究が着実に進むのである。

II．Passiv の解釈の変遷

先に述べた Hans Conon von der Gabelentz の研究からでも現在まで120年ほど経過していることになるが，この120年の間では，すなわち長いドイツ語の歴史から見ればおしまいのわずか120年の間では，Passiv の形態そのもの，Passiv に関する基礎的な定義に変化はない。しかしながら Genera des Verbs (動詞態)の一つとして Aktiv との対比において，如何に Passiv を把握するか，如何に Passiv を見なすかという，いわゆる Passiv の解釈は，変遷を重ねている。次にこの変遷をまとめて整理してみよう[6]。

1．Tätigkeitsform-Leideform

Passiv をそのまま文字通り，ギリシャ語の πάθος (pathos) に由来する "Leideform" ととらえ，一方 Aktiv もまた Passiv と同様にして "Tätigkeitsform" ととらえる，という狭い，限定的な解釈はもう古い，過去のものであろう。たとえば，Er wohnt in Mannheim. Ich höre das Geräusch. などという Aktivsätze はそれぞれ Tätigkeit (活動) を表わしてはいないし，また同じく Der Sieger wird gefeiert. Ich werde gelobt. などという Passivsätze もそれぞれ Leiden (被害) を表してはいないのである。この Tätigkeitsform-Leideform というそのままの，いわば純粋な解釈に当てはまらない例はたくさんあるのである。しかしながら，これに対して，1961年に発表された H.Ammann の遺稿の中では，Ammann は，schlagen (打つ) の型の他動詞の方が，lieben (愛する) の型よりも，より古い層に属しているとしてそれによってまた，Passiv 形式においても，schlagen の型が支配的であることを証明して，Passiv が，Leideform であることを弁明しようとしたが，L.Weisgerber は Amman の企てはほとんど，後継者を見出さないであろう，と評している[7]。なお，この Leideform というとらえ方は発展的に，"Ausdruck des "Betroffenwerdens einer Person oder Sache von der Handlung eines Trägers", von einer am "Patiens" (= "Erleider") sich vollziehenden Tätigkeit des "Agens" (="Urheber")" (訳：ある担い手の行為を，すなわち「(行為を)被る人」に対して行なわれる「(その行為の)主体者」の行為を，ある人もしくはある物が受ける，という表現) と拡大して，現在，理解されているようである。ただし，どちらのとらえ方，理解によっても，主語以外に補足成分を要求しない動詞，すなわち絶対動詞 (自動詞の一部) の Passiv (Man tanzt-Es wird getanzt. Man spricht-Es wird gesprochen.)は当てはまらないことは確かである。なぜならば，行為を受ける，被る側が存在しないからである。ここのところをどう処理するか，がこの1.の Passiv のとらえ方の最大の問題点であるように思われる。

2．Handlung-Vorgang-Zustand

1．の Aktiv-Passiv の考え方に対して，一方で Genera des Verbs (動詞態) を Handlung (ないし Tätigkeit), Vorgang, そして Zustand の三つの概念で分けることが試みられてきた。1922年から1926年にかけて，この試みに従って，Aktiv は Tätigkeit を表わし，Passiv は Vorgang もしくは Zustand を表わすものである，とする W.Meyer-Lübke と，従来の，すなわち1.の考え方に立つ K.Vossler との間で議論が起っている。そして現在，W.Meyer-Lübke の後を受けてこれらの三つの概念による分類を最も徹底させているのが Schulz-Griesbach で，Aktiv は Handlung, Vorgang, Zustand のうちどれかを表わし，werden - Passiv (助動詞として werden を用いる Passiv) はHandlung を Vorgang として表わすので Vorgangspassiv (日本語に訳すと，Vorgang は「なりゆき」というように訳されるが，全体としては「過程受動，動作受動」などとなる)とし，sein- Passiv (助動詞として sein を用いる Passiv)の方は，更に Vorgang の結果，すなわち到達した Zustand を表すものとして Zustandspassiv (日本語ではそのまま，「状態受動」と訳されている) となる。従って，Sie öffnete die Tür. (=Handlung), Die Tür wur-

de geöffnet. (=Vorgang), Die Tür war geöffnet. (=Zustand) というように分類され，理解されることになるのである。ただし，Aktiv が既に Vorgang もしくはZustandを表わしていれば，Vorgangspassiv, Zustandspassiv, のいずれも成立しない。たとえば，Er bekommt einen Brief. Ich habe einen Brief. などにおける bekommen, haben 等の動詞が Passiv を作れないことの説明をこの2.の考え方では，このように説明できるのである。"passivfähig oder nicht" (受動可能か，そうでないか) というのは動詞の重要な Merkmal であり，その合理的説明として十分納得させるものを持っている。

また，一方の Passiv の形式しか可能でない動詞もある。たとえば，Die Tür wird aufgemacht. しかし Die Tür ist aufgemacht. とは言えない。逆に，In dem Brief sind wichtige Nachrichten enthalten. しかし，In dem Brief werden wichtige Nachrichten enthalten. とは言えない。"passivfähig oder nicht" の観点からこれらは更に調べられるべきであろう。ところで，実際，Handlung, Vorgang, Zustand の区別はたいへんむずかしく，Zustand は Handlung 及び Vorgang から客観的に，はっきりと区別できるが，Handlung と Vorgang の区別は主観的になる，と G.Helbig は述べている[8]。

3. Die drei Geschehensarten : einfach-bewirkt gegeben [9]

Form を重視し，ドイツ語の "innere Form" を目指す H. Glinz はまず，伝統文法と伝統の専門語から生ずる偏見を除去しようとする。「純粋に動詞を成分とする過程の接合」についての，はなはだ複雑であるが，しかし首尾一貫した考慮の表皮を除いて，三種のでき事の種別が表われ，この三種に Glinz は最終的に，einfach (単純な)，bewirkt (惹起される)，gegeben (与えられてある) という名を選んでいる，と Weisgerber は紹介している。この結果は，種々の観点の協力から生じたものであるが，採用された Diathese (態，すなわち動詞態) の三種性に対する根拠は最終的には，接合が，本動詞の過去分詞に結合する助動詞として，haben, werden, sein のどれを使っているか，に帰するのである，

一般に，werden を基礎として作られる結合は，経過を selbsttätig としてでなく，bewirkt として表われしめるものであり，その際，主語でなくて外部から来る力が，絶えずまだ作用を続け，その経過に続行する力を与えるものと考えられる，と Glinz は主張するのである。この際，いわゆる主語はもはや，その経過の湧出点でなくて，その経過がそもそもそこに現われ，そこで実現されるところの点なのである。すなわち，werden との結合によって，normal なでき事の方向が，ある程度向きを変えるのである，と Glinz は説いている。sein との結合については，事情は別である。bewirkt とは違って，ist gefunden や ist geschlagen では作用する力が背景にはいってしまって，何よりもまずその力から生じた結果に注目されるのである。過程の作用は，ここではもはや必要でなく，その代り，結果が現存しているのである。すなわち，問題とされうる「状態，実行，環境，結果」のうち，ここで問題となるのは，gegeben ということである，と Glinz は続けている。これに反して，動詞語幹だけに支えられていて，いわゆる複合時称において，haben または sein と結合しても，その点に変動の起きない，でき事の生じ方を Glinz は，はなはだためらいながら einfach と呼びたい，といっている。

以上について，Weisgerber はたとえば，werden との接合は sein の場合と同じように，ほとんど統一的ではない，とし，Es wird gelaufen. のような，unpersönliches Passiv (非人称受動態，と訳されている) を bewirkt の一部と見てよいか，という実際問題をも提示している。

4. Täterbezogene und täterabgewandte Diathese

K.Brinker によれば，ここしばらくで最も詳細な Passiv 研究をしているのは L.Weisgerber ではないか，ということである。すなわち Weisgerber にとっては Passiv の内容の問題が大事であり，また1.のような Leideform としての Passiv の定義は受け入られない。彼は主語の精神的な役割に Passiv の問題を解くカギを見出しており，Passivsatz における，目的語の変化した役割を本来の，決定的なものと見なしている J.Erben と対立しているのである。更に，Passiv によって，すなわち，他動詞の過去分詞が，自動詞的な「助動詞」である werden または sein と結合することによって他動詞の「自動詞化」が行なわれる，とする Erben に対して，Weisgerber は，他動詞の自動詞化として Passiv を見たことは，確かに人を驚かす思想であるが，おそらくまだ Passiv の諸問題の解決には達しないであろう，と述べている[10]。

その Weisgerber は Aktiv-Passiv を Täterbezogene Diathese-Täterabgewandte Diathese としてとらえている。行為者である Täter に注目した，このとらえ方には他動詞の werden-Passiv, sein-Passiv

のみならず es を主語にたてる unpersönliches Passiv, reflexive Verfahrensweisen（再帰的表現），man-構文も含まれることになるのである。1.などに比べると大部包括的な把握になって来ている。

5．Geschehensarten oder Sehweisen

Aktiv-Passiv は objektiv（客観的）に区別されるのか，それとも subjektiv（主観的）に区別されるのか，という問題がある。Glinz は "Geschehensarten" によって，W. Admoni は "Handlungsformen" によって，更に W.Jung は "Handlungsrichtungen" によってそれぞれ客観的な区別をしているが，Weisgerber及び彼の考え方に基づく Duden は Aktiv-Passiv を，それ自体客観的に同じでき事を，別々に見るやり方，と理解することによって主観的な区別を試みている。Helbig は，この点について，Aktiv と，Passiv の中でも werden-Passiv については主観的な区別をすることに異議はないとしているが，sein-Passiv は，Zustand, すなわち Sein を表わすものとして，つまり Geschehen や Handlung を表わすのではないので，主観的な区別も客観的な区別もできない，としている。[11]

6．Das Passiv als Umkehrung bzw. Konverse des Aktivs

Passivはinhaltlich（内容的）のみならず，formal-syntaktisdh（形態統語論的）にも Aktiv の裏返しである，裏返しに過ぎない，という考え方は依然として盛んである。この考え方の「ルーツ」はスイスの言語学者 J.Wackernagel（1853-1938）あたりではないだろうか。彼はこう言っているのである。「Passiv が言語における浪費と呼ばれているのは，もっともであり，そのわけは，受動文というのは，正常な能動文の裏返しを示しているのに過ぎないからである。」[12] また，この Passiv のとらえ方は，他動詞そして werden-Passiv の場合にだけ当てはまるものであって，たとえば Die Tür ist geöffnet. という sein-Passiv に対する Aktivsatz はどういう文なのであろうか，という問題を提示するのである。

Ⅲ．ま と め

以上のように，Aktiv-Passiv のとらえ方は学者によって様々ということになるが，まだ，Passiv は単なる Aktiv の裏返しと見られる傾向が強いようである。これは Passiv にとってはその独立性，独自性を損なうものであると思われる。特に，unpersönliches Passiv, 中でも絶対動詞の Passiv をどうとらえるか，解釈するか，更にはどう評価するか，まだ研究の余地は多いにあるのである。

注

1）ミルカ・イヴィッチ著，早田輝洋，井上史雄共訳『言語学の流れ』，みすず書房，1974, S. 3-4
2）倉石五郎,『ゲルマニストのための言語学入門』，大学書林，1972, S.129
3）江沢建之助：ガーベレンツと現代言語学，慶應義塾大学言語文化研究所紀要第14号，1982,S. 108
4）江沢建之助：ibid. S.107
5）高橋健二，『グリム兄弟』，新潮社，1968,S. 322-23によれば，
Deutsche Grammatik（ドイツ文法）
1.Teil Göttingen 1819.2.Ausgabe 1822
2.Teil 1826
3.Teil 1831
4.Teil 1837
6）Klaus Brinker, Das Passiv im heutigen Deutsch, Heutiges Deutsch1/2, 1.Aufl. München 1971.S.12-18 によってまとめている。
7）倉石五郎：ibid. S.146
Leo Weisgerber, Die Welt im "Passiv", in : Festschrift für Friedrich Maurer, Stuttgart 1963, S36
8）Gerhard Helbig, Zum Problem der Genera des Verbs in der deutschen Gegenwartssprache, in : Deutsch als Fremdspracke5, 1968, H.3, S.131
9）倉石五郎：ibid. S.150-52
Weisgerber : ibid. S.38-41
Hans Glinz, Die innere Form des Deutschen, 2. Aufl. Bern 1961, S.372, 381-83
10）倉石五郎：ibid. S.159, 164
Weisgerber : ibid. S.41-42
11）Helbig : ibid. S.132
12）Weisgerber : ibid. S.29